

詩的实践としてのユーモア

—石垣島の旧盆行事アングマ問答のプルリモーダル分析—

武黒麻紀子(早稲田大学)

1. はじめに

ユーモアは、言語や身体、社会関係、事物、環境の共創から成る詩的パフォーマンス(実践)である(cf. Beeman, 2000)。ユーモアに関しては、言語学での研究を牽引してきた意味論や語用論に加え、近年は相互行為研究や社会言語学でも成果が蓄積されつつある。ただ、心理学、文芸学、人類学、医学といった他分野での議論と比較すると、言語学の(特に意味論や語用論における)ユーモア研究は言及指示やその含意に焦点を当てるあまり、ユーモアを「多様な記号の要素を介して達成されるパフォーマンス」ととらえる視点からは遠かったように思われる。儀礼的集団芸能で展開されるユーモアに着目する本研究は、ユーモアについては詩的実践の包括的な分析を目指して、ことば・身体・事物・環境・社会文化史の融合に主眼を置く“plurimodal”(Kataoka, 2018)の概念を用いながら、沖縄県石垣島の旧盆行事の一つであるアングマで演者と観客が交わす問答に見られるユーモアのプルリモーダルな考察を試みる。そして、相互行為的に達成される詩的実践としてのユーモアがその地域社会での価値観を維持するのに貢献していることを示す。

2. 詩的実践

「詩」というと、短歌や俳句のような詩歌や文学的な叙事詩や抒情詩を想像しがちであるが、Jakobson(1960)は、詩を日常の言語コミュニケーションから独立した言語芸術ではなく、言語芸術を含む言語活動すべての構成要素の一部ととらえた。本研究は、Jakobsonの詩学の考え方から派生、発展してきた詩的実践にまつわる諸概念をベースとする。

2.1 Jakobson(1960)の詩的機能

Jakobsonは、言語の6機能の一つに、ことばそのもの、メッセージそれ自体に指向した「詩的機能」を挙げた。これは、何を言うかではなく、言語或いはコミュニケーションそのものに着目した機能である。この機能のおかげで、何でも起こりうる混沌とした言語コミュニケーションの中にも、ある種の秩序立ったパターンや浮き彫りになってくる形—詩的構造—が生まれる。それは往々にしてリズムや韻律、語彙の反復、繰り返しによってもたらされる。この詩的構造が生み出される仕組みを説明したのが、“[T]he poetic function projects the principle of equivalence from the axis of selection to the axis of combination”(Jakobson 1960:365)（「等価の原理を選択の軸から結合の軸に投射する」）の一節である。Jakobsonは、詩的機能の本質は「反復」と「並行性」に基づく「等価性」にある、と説き、言語学と詩学(文学)の融合を図ろうとした。

言語の詩的特性は、儀礼性の高い式のような場面では言うまでもなく、形式性や儀礼性が比較的低いとされる日常の相互行為の中にも見られる。詩的特性がコミュニケーション全般で広く観察される点については既に多くの研究で例証済みである(Goffman, 1967; Bauman & Briggs, 1990; Silverstein, 1984, 2005; Kataoka, 2009, 2010; 浅井, 2017; 榎本, 2019)。ユーモアの詩的機能を言語に限定しない形で見出だそうする本研究では、Jakobsonの理念をもとに、より包括的で統一的な詩的実践の研究を目指して提案されたKataoka(2018)の概念を以下に紹介する。

2.2 プルリ・モダリティ “Pluri-modality”(Kataoka 2018)

マルチモーダル分析の勢いは、言及指示だけを分析対象としてきた言語学で、ジェスチャーや目線といった身体的動作へも視点を広げていくことに大いに貢献してきた。この流れは詩的実践の分析にも通じる。Kataoka(2018)によると、「詩」とは認識可能となる(ことばに代表されるような)行為の「型」であるがゆえに、詩的特性はことばや身体表象(特にジェスチャー、身振り)のみならず、道具や機器、環境的アフォーダンスを介しても表出する、という。Kataoka(2009, 2010, 2018)では、話し手の目の前の机、思い出語りで立ち現れる過去、地理、テレビカメラが映し出す人物や事物、ヴォイスオーバーといった背景(Ground)すべてが詩的実践の「型」の(再)生産を担っていることが示された。これは「複数の伝達様式(ことば、身体、事物、環境など)を(中略)統一的に観察し、各要素および参与者間の協調や相互作用を分析の射程に収めようとする」(片岡 2017:3) マルチモーダル分析の発想/アプローチに拠る。ここからKataoka(2018)はさらに、

相互行為の背景にはあってもこれまでのマルチモーダル分析では浮上することは少なかったが、言語人類学ではこの包含なくしてコミュニケーション実践を語ることにできないとされている社会文化史をも取り込むべく“pluri-modality”(プルリモダリティ)の概念を提示した。マルチモーダル分析が言語、身体、周辺事物、環境といった割と見えやすい表象を取り入れていたとするならば、プルリモーダル分析はそれに加えて、社会文化史を通して人々のコミュニケーション行動その他に刷り込まれきた有形無形の“habitus”(Bourdieu, 1977)の解明を目指す点で、かつてJakobsonが目指した地平一言語研究と文学・文化研究の接合へに向かっていくための今日的な概念と言えよう。実際に、プルリモダリティという用語の使用はなくても、その神髄を体現する詩的实践の研究が言語人類学では近年増えつつあり(Harkness, 2017; Nakassis, 2017; Lempert, 2018), プルリモーダル分析の重要性は既に十分認識されている。本研究では、プルリモダリティを念頭におき、石垣島の旧盆行事、アンガマ芸能を見ていく。

3. 石垣島の旧盆行事ーアンガマ

3.1 アンガマ芸能

旧暦7月13日から15日は八重山地方でソーロンと呼ばれる旧盆にあたる。この期間、石垣島では市内各地の青年会を中心に先祖供養行事の一つ、アンガマという集団芸能が繰り広げられる。アンガマは精霊を表すとされる先祖夫婦のウシュマイ(爺)とンミー(婆)が20名近い子孫(ファーマー)を引き連れてあの世から現世を訪れるという設定の下、精霊に扮した青年会メンバーが家々や施設(ホテル、保育所、介護施設)を回って行う儀礼である。家を訪問する先祖夫婦は家人に祝言を述べ、その家の先祖の位牌に念仏を唱え、子孫と歌や踊りを披露し、見物客と珍問答を交わし、全員踊りで締め括る。以下、2017年と2019年の旧盆中のアンガマから、先祖夫婦と観客との問答を取り上げ、そこでのユーモアを分析する。

3.2 問答での決まりごとほか

アンガマの問答には、暗黙の了解で共有されている事項がある。参与観察及びインタビューで出た主な点を列挙する。

- ウシュマイとンミーは面を被りクバの葉を持つ。
- ファーマーは体を隠す。
- 質問する見物客は顔を隠す。
- ウシュマイとンミーは口上、会話、問答を裏声で行う。
- 問答は「八重山の方言」で行う¹。
- 質問には「当たり前」に答えてはだめ、
「ダジャレ」や「頓智」で返す。
- ウシュマイとンミーは「島の男」しかなれない²。
- ウシュマイとンミーの役割は「とりしきる」、「楽しませる」こと。



3.3 アンガマの時空間

夏の太陽が沈み、辺りが暗くなる頃、アンガマ一行は見えない死者・精霊を演じようと仮装するあまり、目立って集落を練り歩く。見えない設定に対し外面的に見えすぎる装いが生み出すズレ、というユーモアの典型条件を満たしたところでアンガマのユーモアは既に始まっている。盆装飾で飾られ一階部分が開け放たれた家には、家人や親族はもちろん、ファーマーが奏でる島唄の音を頼りに、知り合いの近隣住民から赤の他人の島人や観光客まで大勢が押しかける。アンガマの儀礼はこうした時空間の中で行われる。



4. 問答にみられる詩的特性

- (1) C: 男児 U: ウシュマイ M: ンミー O: 男児の親族 X, Y, Z: 男児の親族
- 01 C: ウシュマイ
- 02 U: はい
- 03 C: ウシュマイ
- 04 U: はい

¹ 八重山方言話者が減る一方の昨今、青年会メンバーのほとんどが八重山方言で儀礼のすべてを執り行うことはできない。問答の最中、「できれば標準語で教えてください」、「標準語でいいかね?」と出てくることもあり、方言使用は口上・念仏を唱えるときなどに限定されていた。

² ファーマーにはこの決まりが該当しない。ただし、地区や青年会によって条件が異なる場合もある。

- 05 X: はい ウシュマイ はやく
 06 M: 男の子が呼んでるから早くいかんと
 07 U: はい ウシュマーイって呼んだのは誰かな
 08 C: ウシュマーイ (? : ウシュマーイ)
 09 O: こっちこっちこっちーって
 10 U: はい はいはいはいはい (Y: 前出て)
 11 C: ウシュマーイ
 12 U: はい
 13 C: ウシュマーイ
 14 C: ウシュマーイ
 15 U: 名前 なに? 名前 なに?
 16 C: いしがき しまお
 17 U: しまお? はい しまおー はい 返事は? 返事
 18 C: ウシュマーイ
 19 アンガマのおうちは どこですか?
 20 U: アンガマのおうちはよ 天国にあります
 21 C: どうやって行くの? どうやって行くの?
 22 U: どうやって行くか?
 23 ((ンミーを見る)) どうやって天国に帰るかよ 来たのはいいけど どうやって帰るかは 今 考え中
 24 U: しまお 何歳? 今
 25 C: よん
 26 U: 4歳? ウシュマイも4歳 ((沈黙後、しまおが両手を天に向ける))
 27 U: しまお おりこうだなあ よー (O: 最後にやろうね) 最後に一緒に踊りやろうな (C: ((頷く)))
 28 U: 最後にな (C: ((頷く)))
 29 U: 待ってろよ ((音楽が始まる))
 30 C: ありがとうございます
- (2) U: ウシュマイ S: 質問者 (紙面の都合上、相槌は括弧の中に入れて記す)
 01 S: ウシュマーイじいちゃんがよ (U: オー) 齒
 02 U: は
 03 S: 齒あ がよ (U: ハー) 全部抜けてないかね ウシュマイじいちゃん 齒あが ないさね
 04 U: なんでよ 齒が ないかってよ? (U: オー) ((背後の赤ちゃんがンミーに抱かれて大泣き、皆笑う))
 05 うちの? (S: アイ) ?しきよ (S: オー) ?ぎしきよ (S: オー) ?よ (S: オー)
 06 むかーしからの時代 戦争のときによ (S: オー) 戦争のときによ
 07 S: 日米戦争 オー
 08 U: あの 田あや畑に 田の畑から (S: オー) アメリカ軍がよ (S: オー)
 09 鉄砲をよ (S: 鉄砲) 持って来とってよ (S: オー)
 10 あの ウシュマイとンミーの家によ (S: オー)
 11 ダダダダって 打ってきたわけよ (S: ホホホ)
 12 ウシュマイとンミーよ (S: ホー) ファーマーかかえてよ
 13 S: ファーマー抱えて
 14 U: 右に左に足によ (S: ウン) 抱えてよ (S: オー) 逃げたわけよ (S: オーオー)
 15 後ろからよ (S: オー) アメリカ ドドドドドドドドドってよ
 16 S: 発砲射撃
 17 U: 発砲射撃でよ (S: ウン) それもよ (S: ウン) ウシュマイよ 齒あでよ
 18 カアーッペッ (S: ホイ) カアーッペッてよ
 19 気付いたら 齒あ 抜けとったさ
 20 ファーマー守るためによ
 21 S: ファーマー守るために



- 22 U: ファーマー守るために みんなよ 歯あを (S: ウン) 捨てたさ (S: あー) OK?
- 23 S: 分かった (U: ヨー) どうもありがとうございます (U: ア?)
- 24 にーふあいゆー
- 25 U: あー はい はい はい あー はい はい はい はい はい はい
- 26 S: ありがとうございますー

問答の詩的構造は質問者が子供と大人（特にサクラ）との場合で異なる。大人同士では先祖夫婦の短い発話が終助詞が示すイントネーションユニットを合図に、観客が相槌を打つ間へととなり、そこに一定のリズムが形成されるが、オチに近づくと終助詞や相槌が入らなくなる。（子供との問答では相槌やリズムの代わりに虚構を信じる子供の存在自体が周囲の大人を笑わせる。）その先は子供との場合も同様で、オノマトペやボケ（ツッコミは無し）、クバの葉の使い方の変化やピッチの下降があってクライマックスを迎える。1分半から2分以内でまとまる問答は、音楽の導入、クバの葉を揺らす動き、ウシュマイとンミーの体の向きの転換により終了し、次の演目（踊り）へと移行する。

問答内容は、どの地域のアンガマでもあの世話や道徳話に終始している。毎年島内のどこかしらで繰り返される旧盆ネタ（これ自体が詩的に形成されている）や地域のみで通じる固有名詞の使用によって観客の笑いを誘いつつ、先祖崇拝や年長者敬重が伝えられていくアンガマは、あくまでも島での日常と島の家族観に根差した詩的实践である。それは、儀礼空間に在る事物や自然条件（演者達の装い、持ち物、当該地の気候、家/施設の構造、盆関連の装飾や供物）といった視覚・聴覚・触覚・皮膚感覚を通して把握可能な要素と、参加者及び観客の共在関係、地域に伝わる民俗や道徳観といった思想文化にまつわる要素とがプルリモータルに生み出す共創である。

参考文献

- 浅井優一 (2017). 儀礼のセミオティクス:メラネシア・フィジーにおける神話/詩的テキストの言語人類学的研究 三元社
- Bauman, R. & Briggs, C. L. (1990). Poetics and performance as critical perspectives on language and social life. *Annual Review of Anthropology* 19: 59-88.
- Beeman, W. (2000). Humor. *Journal of Linguistic Anthropology* 9(1-2): 103-106.
- Bourdieu, P. (1977). *Outline of a theory of practice*. Cambridge University Press.
- 榎本剛士 (2019). 学校英語教育のコミュニケーション論:「教室で英語を学ぶ」ことの教育言語人類学試論 大阪大学出版会
- Goffman, E. (1967). *Interaction ritual: Essays on face-to-face behavior*. New York: Doubleday Anchor.
- Harkness, N. (2017). Transducing a sermon, inducing conversion: Billy Graham, Billy Kim, and the 1973 crusade in Seoul. *Representations* 137: 112-142.
- Hanks, W. F. (1989). Text and textuality. *Annual Review of Anthropology* 18: 95-127.
- Jakobson, R. (1960). Closing statement: Linguistics and poetics. In *Style in language*, ed. T. Sebeok, 350-377. Cambridge, MA: MIT Press.
- Kataoka, K. (2009). A multi-modal ethnopoetic analysis (Part 1): Text, gesture, and environment in Japanese spatial narrative. *Language and Communication* 29: 287-311.
- Kataoka, K. (2010). A multi-modal ethnopoetic analysis (Part 2): Catchment, prosody, and frames of reference in Japanese spatial narrative. *Language and Communication* 30: 69-89.
- 片岡邦好 (2017). 言語/身体表象とメディアの共謀的实践についてーバラク・オバマ上院議員による2008年民主党党員集会演説を題材に」社会言語科学, 20(1), 84-99.
- Kataoka, K. (2018). Poetics, performance, and pluri-modality: From Asia-Pacific perspectives. Paper presented at Sociolinguistics Symposium 22. The University of Auckland.
- Lempert, M. (2018). On the pragmatic poetry of pose: Gesture, parallelism, politics. *Signs and Society* 6(1): 120-146.
- Nakassis, C. (2017). Rajini's finger, indexicality, and the metapragmatics of presence. *Signs and Society* 5(2):
- Silverstein, M. (1984.) On the pragmatic 'poetry' of prose: Parallelism, repetition, and cohesive structure in the time course of dyadic conversation. In *Meaning, Form, and Use in Context: Linguistic Applications*, ed. D. Schiffrin, 181-199. Washington, DC: Georgetown University Press.
- Silverstein, M. (2005) The poetics of politics: "Theirs" and "ours." *Journal of Anthropological Research* 61(1): 1-24.